

伊勢物語

新 典 社

影印校注古典叢書 6

伊勢物語

昭和50年5月1日 初版発行
平成元年4月1日 15版発行
定価一六〇〇円

校注者 小林 茂美
発行者 松本 輝茂
印刷所 (株)相馬企画
製本所 牧製本印刷(株)
検印省略・不許複製

発行所 株式会社 新典社

東京都千代田区西神田三十五・六 大坂ビル
TEL 東京二六五(三七八一・三八六三番
振替 東京七一二六九三二番

郵便番号一〇一

ISBN4-7879-0206-7 C3393

伴路物語

小林
茂美
校注

新
典
社

伊勢物語

定家卿真筆

（底本所収の墨塗箱を入れた桐箱の蓋表面中央に貼られてあつた外題）

本書の底本は、学習院大学所蔵の伝定家筆本「伊勢物語」で、三条西家旧蔵の証本である。墨塗り箱入り。縦十六・三三センチ、横十六・一七センチの胡蝶装冊子。料紙は薄様の鳥の子。張数九十二葉のうち墨付は九十葉。その第一葉と第九十二葉が表紙で、表面中央に「伊勢物語」と墨書。本文は第二葉裏の頭切から第八十五葉裏の六行まで。

此伊勢物語者京極黄門真跡

無變之鴻賓也泰為

後花園院御秘本之處故相云

羽林實連可道器量按群依

敬感賜之然与不幸復令長孫

三年十月廿日薨逝矣十七時

愛宮道親元子来昭道結腰

渌し走存其舊好附属いか

畢後親元死に依違命

取返送り也

赤田下巻

此をたゞしむるは定家の筆とすべし

一面の行数はほぼ九行前後で、所々に朱書で声点(単語五十数か所)や武田本との校合(十八か所)を書き入れ、墨筆で勘物や異本の本文(四十八か所)を注する。第八十六葉裏から第八十九葉裏にかけて、主要な登場人物の略歴および釈義を載せ、第九十葉裏には定家の付した天福本の奥書きを、第九十一葉の裏には武田本の奥書き(本書書写の後、明応七年(一四九六)六月、三条西実隆(四十五一五五)の転載)を載せる。「戸部尚書」の下の定家の花押は、一度原本を模写し、さらに原本から影写したと思われる小紙片を、その上に貼付したものである。

なお、上掲の影印は、表紙の見返しから第一葉表にかけて貼付されてあった実隆自筆の紙片。後花園院(四九一四〇)の御秘本であつた定家自筆本を、三条西実連(四二一四四)に下賜され、実連没後は、旧好によつて宮道親元(四三三一四六)に遣わし、親元没後は、実連の弟前内大臣実隆に返還された旨の、伝来事情を記したもの。本書が定家自筆本と伝えられたのは、主にこの記事によるが、底本の書写は鎌倉期を遡りえず、筆跡も定家自筆とは認めがたい。松尾聡博士は、返送された定家自筆本を他に譲るさい、新たに作らした臨写本に、先の貼紙だけはがしとつて移貼したものと見られた。この臨写本が、本書の底本である。しかし、これがたとえ定家自筆本でないにせよ、その面影を忠実に留め、天福本としてはほとんど完璧に近いところから、同系統本のうちもつとも信憑しうる証本の一つと認定されている。

凡 例

一、本書は、影印講読ができるようになることを主眼とし、広く国文学に関心を持たれる方々のために編集したものである。

一、本書の影印は、学習院大学所蔵(三条西家旧蔵)の伝定家筆本「伊勢物語」(いわゆる天福本系統の古鈔本)を、そのまま縮小して、その全文を入れた。

一、翻刻は、影印の原形そのままに、変体仮名だけを現行活字の字体に直して掲げた。

一、翻刻の句読点は、読点だけを、読むときの一応の目安としてつけた。

一、注が必要と認められたものには、頁ごとに通し番号を付し、注した。

一、注は簡潔を旨とし、最少限度のものを入れたが、底本所収の歌には通し番号を付し、それと同一の歌または類歌を所収する文献・歌集の代表的なものを掲げた。

一、校異は、必要と認めた個所にだけ異本によって示したが、スペースの都合上、仮名を漢字に改めたり、読解の便をはかって読点・濁点を施した場合もある。

本書の底本として使用を快諾くださった学習院大学図書館に対し、心からお礼申しあげたい。また、本書を編するに当たって、国学院大学講師 林田孝和氏および池田憲昭氏のご協力を得た。記して謝意を表する。

変体仮名初出一覧表

太字は五十音図の字源を示し、その下の文字は、本書の初出字源（上段の数字は頁数、下段の数字は行数）の全部を示しました。ゆえに、ここに掲げてある字源をマスターすれば、本書の変体仮名はすべて読めるようになります。

た	そ	せ	す	し	さ	こ	け	く	き	か	お	え	う	い	あ
太	曾	世	寸	之	左	己	計	久	幾	加	於	衣	宇	以	安
多 $\frac{6}{4}$	曾 $\frac{6}{3}$	世 $\frac{14}{3}$	寿 $\frac{6}{2}$	志 $\frac{6}{2}$	佐 $\frac{6}{2}$	古 $\frac{46}{10}$	个 $\frac{6}{3}$	具 $\frac{62}{10}$	起 $\frac{7}{2}$	可 $\frac{6}{1}$	於 $\frac{6}{1}$	衣 $\frac{6}{6}$		伊 $\frac{6}{4}$	阿 $\frac{52}{9}$
堂 $\frac{7}{1}$			春 $\frac{6}{5}$				遣 $\frac{6}{7}$					江 $\frac{130}{2}$		井 $\frac{46}{5}$	
			寸 $\frac{6}{6}$				希 $\frac{19}{2}$								
			須 $\frac{32}{3}$				計 $\frac{148}{4}$								
			数 $\frac{8}{2}$												
み	ま	ほ	へ	ふ	ひ	は	の	ね	ぬ	に	な	と	て	つ	ち
美	末	保	𠂔	不	比	波	乃	祢	奴	仁	奈	止	天	川	知
三 $\frac{7}{10}$	万 $\frac{6}{4}$	本 $\frac{10}{6}$		布 $\frac{6}{1}$	飛 $\frac{7}{7}$	者 $\frac{6}{5}$	乃 $\frac{6}{2}$	年 $\frac{44}{9}$		尔 $\frac{6}{2}$	奈 $\frac{6}{2}$	登 $\frac{8}{1}$	帝 $\frac{19}{10}$	徒 $\frac{7}{7}$	
見 $\frac{54}{5}$	末 $\frac{6}{6}$			婦 $\frac{60}{8}$	日 $\frac{9}{4}$	八 $\frac{8}{9}$	能 $\frac{18}{3}$			二 $\frac{58}{3}$	那 $\frac{24}{3}$			川 $\frac{120}{1}$	
	満 $\frac{9}{1}$					葉 $\frac{127}{8}$									
ん	を	ゑ	ゐ	わ	ろ	れ	る	り	ら	よ	ゆ	や	も	め	む
无	遠	恵	為	和	呂	礼	留	利	良	与	由	也	毛	女	武
无 $\frac{6}{4}$	越 $\frac{9}{2}$	恵 $\frac{63}{6}$	為 $\frac{6}{1}$	王 $\frac{74}{2}$		連 $\frac{49}{2}$	累 $\frac{6}{2}$	里 $\frac{6}{3}$			遊 $\frac{142}{2}$		毛 $\frac{6}{6}$	免 $\frac{13}{8}$	無 $\frac{70}{9}$
		衛 $\frac{96}{8}$					流 $\frac{68}{8}$	利 $\frac{6}{7}$							
							類 $\frac{126}{4}$								

一「昔」は過去のある時を漠然という。「昔男」だけで、「昔男ありけり」(塗籠本)の意。伝承の物語を語り伝えるという伝統形式。二貴族の子弟が元服して、初めて従五位をいただくこと。「元服」と解しては不十分。成年式のための物忌みに服する期間、そのしるしとしてつけるのが冠。これを脱いで初めて元服したことになる。三奈良市春日山の東麓。「京」と音読することで、当時はハイカラなニュアンスをもった。四領地があ

「二段」
むかし、おとこうるかうふりして、

ならの京かすかのさとしる

よし、てかりにいにけり、その

さとに、いとなまめいたるをんな

はらからすみけり、このおとこ、

かいまみてけり、おもほえすふ

さとにいとほしたなくてありけ

れは、こ、ちまとひにけり、おとこの

る由縁で。「して」は、でもっての意。五「なまめきたる」の音便。みずみずしく優美な。六同腹の姉妹。七物のすき間から見ること。「かき目見る」の音便で、かきは接頭語。「垣間見」は、民間語原説からの宛字。八旧都。かつては栄えたが、今はもてはやされなくなった里。九「はした」は中途半端。「なし」は形容詞語尾。廃墟の情景とは似ても似つかぬ美女が二人もいたので、(男は)ひどくそぐわれない気がして。

一
じっねと、こうわかうありて
から乃京かあ、のいよふふ
う、て、ういよふいよふうの
いよふいよふめいふうをんか
えううもふうふこのねとこ
か、いふみてふふねもほえすあ
さよふいよふうかくてありま
れとこ、ちまふいよふわねとこの

きたりけるかりきぬのすそを

きりて、うたをかきてやる、そのお

とこし^二のふすりのかりきぬをな

むきたりける、

1 かすかの、わかむらさきのすり衣^三
新古今^四

しのふのみたれかきりしられす

となむをいつきていひやりける、

ついておもしろきこと、もや思けん、

2 みちのくの忍もちすりたれゆへに^五
古今

みたれそめにし我ならなくに

「鷹狩に用いた男子服。狩はもと占いだから、そのための小忌衣。のちに晴の日の服装となり、平安時代には貴族の平常服となった。『すそ』は、袴の外にだす前身ごろの裾であろう。『小忌衣のしるし』として、忍草の形を摺り染めた狩衣。陸奥国信夫郡の産（信夫摺り）と固定する説は非。1 番歌—古今六帖第五。新古今集卷一—恋一、業平。『若々しい紫草。その根から紫色の染料をとった。紫草は万葉時代から愛の象

もすのりゝるが、見よぬのまうを
起りてうゑをひきてやろうのれ
とこさるふまりのかわきぬを
じよゝゝろろ

新古今

かきつゝ、わつじらほよのむら衣^六
しのふのみたれかきりしられす
とふじをいひよていむやりろろ
はいておもしろきこととや思けん
みちのくの忍もちすりたれゆへに^七
みたれそめにし我ならなくに

新古今

徴。ここでは若く美しい「女はらから」を暗示する。『しのぶの乱れ』の序となり、忍摺り模様の乱れと恋いのぶ心の乱れとを掛ける。『後から追いかけて』追ひ継ぎて』説、老いづきて』説もある。『その場合として。2 番歌—古今集卷一四恋四、河原左大臣。七「みちのく」は「しのぶ」の枕詞、「しのぶ」は地名信夫と忍草との掛詞。一句までが「乱れ」を起こす序、「そめ」は乱れ染めと乱れ初めの掛詞。塗籠本「みたれそめけむ」。

一趣の意。ニ「いち」は語勢を強める接頭語、「はやし」は荒れること、乱暴なこと。すばやいと解すのは後代の言語情調。「みやび」は「ひなび・さとび」に対する語で、宮廷風、都会風のハイセンスを示す。「こんな無茶な臨機の風流をした」という、裏からの賞賛がある。三奈良の都は離散し衰えて。長岡京遷都は延暦三年(七五五)、平安京遷都は同一三年(七五四)。四平安京。五朱雀大路から西半分の右京(西の京)。先に開けた

といふうたの心はへなり、むかし人

は、かくいち^ニはやきみやひをなん

しける、

河原大臣哥也 左大臣源融、寛平七年八月薨^{廿五日}七十
於在中将非幾先達如何^三

〔二段〕
むかし、おとこ有けり、ならの京は

はなれ、この京は人の家また

さたまらさりける時に、しの京

に女ありけり、その女世人^みにはま

されりけり、その人かたちよりは心^へなん

左京(東の京)に対し、後世も栄えない右京の当初を念頭に書いている。六人並みの人以上。セ心に対して容貌。ハ心意気、心入れなどの奥ゆかしさが基調。プライドが高く、見識・趣味の高尚なことにおいて、またと得がたい美点の持ち主だった。当時、男性が通うに足る女性の理想像が示されている。

心ようの心はへなりむかし人
はかくいちはやきみやひをなん
しける

河原大臣哥 石大源融寛平七年八月薨^{廿五日}七十
於在中将非幾先達如何

二
むかし、おとこ有けり、ならの京は
はなれ、この京は人の家また
さたまらさりける時に、しの京
に女ありけり、その女世人にはま
されりけり、その人かたちよりは心なん

まさりたりける、ひとりのみもあら

さりけらし、それをか^二のまめをと

こうち^二ものかたらひてかへりきて、

いか、思ひけん、時はやよひのつ^二いたち、

あめそ^二をふるにやりける、

3 おきもせずねもせてよるをあかしては
古今

春の物とてな^二かめくらしつ

〔三段〕
むかしおとこありけり、けさうし

ける女のもとに、ひしきもといふ

ものをやるとて、

「独り身でもなかった（通う男がいた）に違いない。＝女に対して誠実な男。＝「語らふ」は話しかけて自分の仲間に引き込むこと。思い通りに情を交わして。＝他にも通う男のあることを知って、不安になつてきたこの男の気持ち、作者が推測している。＝「月顯つ」の意。朝日と限らず上旬。＝古くはソヲフル。そばふる、しとしと降る。＝番歌——古今集卷一三恋三・業平集、在原業平。セせずして↓せずして↓せで。＝霖雨^{れんう}忘^{わす}の

あめさるるをふるむのみのみあら
けさうしものかたらひてかへりきて
いか思ひけん時はやよひのついたち
あめそをふるにやりける
おきもせずねもせてよるをあかしては
古今
春の物とてなかめくらしつ
〔三段〕
むかしおとこありけりけさうし
ける女のもとにひしきもといふ
ものをやるとて

略。長雨とばんやり物思いにふける長目との掛詞。五月雨のころはじまる
る。周期的な神事をひかえて、一定の期間、男女は隔離されて禁欲の物忌
み生活に入る。その時の耐屈感から、ばおつとして目を放つ痴呆状態が
原義。そのエロスの情感を潜在させ、自己の恋情の悩みを幾分内省しつ
つ、はんやりと物思いにふける姿態の抒情用語。＝懸想じ。思いをかけ、
懸想文をやる手順をふむ。＝和名抄「鹿尾菜比須木毛」。今のひしき。

4 番歌—大和物語—六一段。「私を思つて下さるお心があるなら。「思ひ」には服喪をさす用例もある。二 律の生い茂るあばら屋。飯屋・喪屋の印象もある。三 「な」は完了の助動詞「ぬ」の未然形、「む」は意志の助動詞終止形。四 鹿尾菜藻と引敷物との掛詞。鹿尾菜を混えた御飯（ヒジキオモノ）が、諷刺に供せられた例は持統紀にある。本来は女側の歌で、古代葬礼を背景とした伝承歌か。五 藤原長良の女高子（八四—九三）。貞観

4 思ひあらはむくらのやとにねもしなん

ひしきものにはそてをしつゝも

二条のきさきのまたみかにも

つかうまつりたまはてたゝ人にて

おはしましける時のこと也、

〔四段〕

むかし、びんかしの五条に、おほき

さいの宮おはしましけるにし

のたいに、すむ人有けり、それ

を、ほいにはあらて心さしふかゝりける

八年（六八）清和天皇の女御、陽成天皇の御生母。塗龍本「五条后」。六 最高の人に比べて低い人。大臣でも宮廷に対してはたゞ人。七 大后の宮。仁明天皇の皇后、文德天皇の御生母、五条后順子。冬嗣の女で高子の叔母。八 寝殿造りの正殿に主人が、東西北三方の対の屋には家族・召使たちが住んだ。九 高子を暗示。一〇 本来それが目的（本意）ではなくて。「ほいにはあらて」時頼本・神宮文庫本・真名本「だ」と、あらわでなく忍んでの意。

思ひあらはむくらのやとにねもしなん
ひしきものにはそてをしつゝも
二条のきさき乃もまたみかにも
つかうまつりたまはてたゝ人にて
おはしましける時のこと也

むかし、びんかしの五条に、おほき
さいの宮おはしましけるにし
のたいに、すむ人有けり、それ
を、ほいにはあらて心さしふかゝりける

ひとゆきとふらひけるをむ月の
 十日はかりのほとに、ほかにかくれ
 にけりありところはきけと人の
 いきかよふへき所にもあらざりけ
 れは、猶うしと思ひつゝ、なんあり
 ける、又のとしのむ月に、むめの
 花さかりにこそをこひていき
 て、たちて見、みて見、見れとこそに
 なるへくもあらず、うちなきてあはら
 なるいたしきに月のかたふくまで

一順子などの意志で隠されたと解されている。二居場所。三普通の身分
 の者が出入りできる所でもなかったため。四宮中をさし、女が女御として
 入内したことを暗示するとも。五塗籠本は「こそをおもひてかのかのにし
 のたいにいきて」とあつて詳しい。六「みる」は坐ること。立つても見、
 坐つても見、いろいろしてみたが。簡潔な連鎖法表現で、去年の思い出
 を取り返そうとする男の動作と心境が、遺憾なく描写されている。七か

ひとゆきとふらひけるをむ月の
 十日はかりのほとにほかにかくれ
 にけりありところはきけと人の
 いきかよふへき所にもあらざりけ
 れは猶うしと思ひつゝなんあり
 ける又のとしのむ月にむめの
 花さかりにこそをこひていき
 てたちて見みて見見れとこそに
 なるへくもあらずうちなきてあは
 らなるいたしきに月のかたふくまで

つて住んでいた人もいなくて、壁・板戸や調度などもない、がらんとし
 た板敷きの間。当時の寝殿造りは板敷きで、その上に薄縁を敷き、身分
 の高い人は畳を重ねた。「あばら」の誤解から、荒れ果てた家とか、隙
 間の多い板敷きの意にも転じた。

5番歌―古今集卷一五恋五・古今六帖第五、業平。「や」には反語説と疑問説があり、「もとの身にして」以下の省略内容も、①去年の女はすてにもとの身ではない、②自分の心はもとの気持ちではない、③「①②をふまえて」あたりのすべてが変わり果てて見える、などの解がある。不変の自然と変貌した人事との対照を重ねくみれば反語説になるが、論理の低徊が目立つ。疑問と解して女には言及せず、上下句の倒置法とみれば、逡巡

ふせりて、こそを思いて、よめる、

5 月やあらぬ春や昔のはるならぬ
古今

わか身ひとつはもとの身にして

とよみて夜のほのくくとあくるに、

なくくかへりにけり

〔五段〕

むかし、おとこ有けり、びんかしの五条

わたりに、いとしのひていきけり、

みそかなる所なれはかとよりも、

えいらて、わらはへのふみあけたる

ついひちのくつれよりかよひけり、

して疑念が解けないまま時をすこす哀感が素朴に深まる。「心余りて詞足らず」な業平歌の典型。ニひそかな所。塗籠本「しのふ所」人目を忍んで通う所。三「え(副詞)……で(打消して)」は否定表現。吉の音便がえう(よう)で、関西方言「よう……せぬに相当。よう入らないでの意。四「わらは」は髪の色がばらばらになつてゐること。童児を指す語はすべて髪形からの命名「べ」は群の転。五築泥の音便、土を築いて作つた土堀。

あせりて、こそを思いて、よめる

月やあらぬ春や昔のくうならぬ

わか身ひとつはもとの身にして

とよみて夜のほのくくとあくるに、

なくくかへりにけり

むかし、おとこ有けり、びんかしの五条

わたりに、いとしのひていきけり、

みそかなる所なれはかとよりも、

えいらて、わらはへのふみあけたる

ついひちのくつれよりかよひけり、

ひとしけくもあらねと、たひかきなり

ければあるしき、つけて、その

かよひ地に、夜ことに人をすへて

まもらせければ、いけともえあは

イ無多本

てかへりけり、さてよめる、

⁶ ひとしれぬわか、よひちのせきもりは

古今

よひくことにうちもねな、ん

とよめりければ、いといたう心や

みけり、あるしゆるしてけり

二条のきさきにしのひてまいりけるを、

一 塗籠本「人たかしくも」(もの見高くも)。二 五条后順子を暗示。「ある

じ」は、「馳走のことから転じて、馳走する人、すなわち主人の意。

三 人を「すゑて」。「せ」は使役の助動詞。四 上の「夜ごと」とある文脈からみて、逢えないで帰った経験の累積を言っている。五 番歌—古今集巻一三恋三、業平。六 人に知られぬ。七 「関」は人をせきとめるもの。

「関」と、恋を妨げる意の「塞き」とを掛ける。「は」は、特に取り出し

むとけくもあらねと、たひかきなり
 ければあるしき、つけて、その
 かよひ地よ、夜ことに人をすへて
 まもらせければ、いけともえあは
 てかへりけり、さてよめる

ひとしれぬわか、よひちのせきもりは
 よひくことにうちもねな、ん
 とよめりければ、いといたう心や
 みけりあるしゆるしてけり
 二条のきさきにしのひてまいりけるを

ていう意の助詞。セ「うちねる」(まあ寝る、とりあえず寝る)の中間に感動の助詞「も」が入った形。「なむ」は完了の助動詞「ぬ」の未然形に接続して、他に詠え望む意の終助詞。寝てしまつてほしい。八 女が心を痛めた。塗籠本の「ぞんじける」だと、主人の処置に怨じた(すねた)となる。九 (男の通うことを)黙認したことだ。「て」は完了の助動詞「つ」の連用形。二〇以下の文は塗籠本にない。後人の追記。

一世間の評判、噂。二兄人の音便。男兄弟を指して女から親しみ呼ぶ語。二条後の兄たちは国経・基経ら(後出)。三「せ」は使役。四女で、よう手にはいるまいと思われるその女を。身分が高く、女御・更衣に上がることの定まっている人という設定。五「呼ぶ」の再活用「呼ばふ」の連用形。男が女の家を訪れ、わが名を名告つて求婚すること。これに女が応じて名告れば成立する。「わたる」は通う動作の継続態。六かどわか

世のきこえありければ、せうとたちの

まもらせたまひけるとぞ、

〔六段〕

むかし、おとこありけり、女のえうま

しかりけるを、としをへてよはひわ

たりけるを、からうしてぬすみて、

いとくらきにきけり、あくたかはと

いふ河をみていきければ、草の

うへにをきたりけるつゆをかれは

なにそとなんおとこにとひける、

して。塗籠本の「女の心をあはせてぬすみて」だと、女の合意を得て連れ出すことになり、いわゆる「嫁盗み婚」本来の型に入る。セ①摂津国三島郡(大阪府高槻市)の芥川。②禁中の塵芥を流す大宮川。③仮構の川など諸説ある。「あくた」は阿久津・阿久土(悪土)と同語、川沿いの漸湿地なら、どこでも起こりうる名称。本段の説話性からみて①説が妥当か。へ深窓育ちの貴い女なので、夜道の露も知らないという誇張表現。

そのきこえありければ、せうとたちの
まもらせたまひけるとぞ、

むかし、おとこありけり、女のえうま
しかりけるを、としをへてよはひわ
たりけるを、からうしてぬすみて、
いとくらきにきけり、あくたかはと
いふ河をみていきければ、草の
うへにをきたりけるつゆをかれは
なにそとなんおとこにとひける、

ゆくさきおほく夜もふけにけれ
 は、おにある所ともしらて、神さへ
 いといみしうなり、あめもいたう
 ふりければ、あはらなるくらに
 女をおくにをしいて、おとこ、
 ゆみやなくひをおひてとくちに
 をり、はや夜もあけなんと思つ、
 ゐたりけるに、おにはやひとくちに
 くひてけり、あなやといひけれと、
 神なるさはきにえきかさりけり、

一行く先の道程が、遠くたくさんあるの意。塗籠本「ゆくさきい」とは
 く。二「おに」は「もの」とほぼ同じで、山中の精霊の総称。不可視の
 霊物だが、昇華して神格を得なかったものは、道教・仏教の邪鬼と結合
 して、擬人化された怪物の鬼相を固定した。三雷。「なる神」の後置修
 飾格。四荒れてがらんとした校倉。足の高い建物に板がくい違いに打ち
 つけてあり、梯子をかけてのぼる。「倉」はもと神座、そこに神霊がす

ゆくさきおほく夜もあきあき
 ゐちあきあきあきあきあきあき
 いといみしうなりあめもいたう
 ふりければあはらなるくらに
 女をおくにをしいておとこ
 ゆみやなくひをおひてとくち
 をりはや夜もあけなんと思つ
 ゐたりけるにおにはやひとくち
 くひてけりあなやといひけれと
 神なるさはきにえきかさりけり

むのは当然。五弓と胡篋。胡篋は矢を入れて背に負う道具。六「なむ」
 は詠えの終助詞。七鬼はもうとくに（女を）一口に食つてしまつてい
 た。八「あれつゝあつゝ」という叫び声。塗籠本「あらや」「や」
 は感嘆。九古代人にとつての雷鳴・雷光は「なる神」天降りの表象。鬼
 の出現が雷鳴を伴い、神座に入れられた処女が、鬼（神霊）に食われる話
 には、神仕えした古代巫女の信仰的説話の裏づけがある。